

II ジェンダーの視点による学術の再構築

これまでの科学を見直し、その再構築を図かろうとする営みは、さまざまな方向から試みられているが、ジェンダーの視点からの提起もまたこのような潮流の中で重要な意味をもつものである。1960年代に女性学が提起されてからすでにかかなりの年数を経過しているが、その間に、より幅広く、多様な学問領域において、過去の研究がもっていた問題点が意識されるようになり、新しい視点に基づく研究が進められるようになってきた。もちろん、学術の世界は、日々新たな研究が重ねられて、新しい視点が示されるだけに、ジェンダーの視点による再構築についても、今後それがどのように展開していくのか予測することは困難である。

女性学が、女性による、女性についての学問研究として出発したことからも理解できるように、これまでの学術がほとんど男性研究者によって担われてきたことが、ジェンダーの視点による学術の再構築を必要とさせた要因であった。近年まで、研究者の大部分が男性によって占められ、とりわけ研究を主導する立場の者の場合にはその傾向が強かった。高等教育の享受における制度上の女性差別が解消された後も、この傾向は容易にうち破られてこなかった。しかしながら、わずかずつにせよ女性研究者が増加し、活躍するにつれて、従来の研究がもっていた男性中心の歪みが明らかにされ、よりバランスのとれた視点からの研究が必要であることが強調されるようになった。その結果、単に女性研究者によるだけでなく、男性研究者も加わって、ジェンダー視点による学術研究が展開されるようになってきている。

ジェンダー視点による学術の再点検は、過去の学術研究のさまざまな歪みを明らかにしてきた。研究課題の設定において、社会における性別分業の下での男性の立場が投影されて、男性的な視点があたかも社会の一般的なあり方であるかのように考えられ、研究が進められてきた。その結果、社会のある種の側面は見落とされ、分析の場に乘せられることなく見過ごされてきた。

男性が職業労働に、女性が家事育児にという固定的な性別分業が当然の前提とされていた時期には、家族はこうした分業に基づいて構成されているものとしてとらえられた。その結果、人間の成長発達過程の研究も、もっぱら母親と子どもの関係が取り上げられ、父親の役割について考察されることがほとんどなされてこなかった。職業労働だけが価値を生むものと考えられたことから、労働という概念の中に家事労働などは含まれないままで扱われてきた。こうした視点が学術研究における課題設定、概念構成、研究方法などのすべてに影響を与えてきた。社会や文化にかかわる実証的研究にとって基本的に重要な各種の統計の編成においても、ジェンダー視点にとっては欠落の多いものであった。性別の分類や表示がなされていないことから、重要な点についても、必要な資料が得られないという状況が少なくなかった。

ジェンダー視点からの学術研究の再構築が重要であるということは、もちろん人間の社会や文化にかかわる人文科学、社会科学の分野において、まず指摘されてきたことであり、多く見いだされたことであるが、自然科学の分

野においてもその影響から逃れていたわけではない。

たとえば、性差を考慮した医療は、わが国ではまだ緒についたばかりといわざるをえないが、この分野での先進国アメリカでもここ十数年の間に大きな進展を見せたに過ぎない。医学研究者の大多数が男性であったことと、医薬品の臨床治験に女性を対象とすることに問題があると思われてきたことなどから、男性を対象とした治験の結果に基づいて性差を無視した医療が一般に行われてきた。性差を考慮した医療の発展によって更年期障害などの治療が進められるようになったばかりでなく、男女の生物学的、生理学的な差異の探求が深められ、肉体的・精神的な特質との関連を明らかにすることが目指されるようになってきている。

性差を考慮した医療は、このようにして性差を考慮した生物学を導いてきているが、こうした形で、人間を対象とするものから生物を対象とする研究にまで広がっていくとき、男女の差の意味が問題となる。すなわち、人間の場合に健康に関係する要因としての男女の差異には、生物学的な性差とともに、職業や社会的地位など社会生活の様態における男女の差異としてのジェンダー要因も重要な意味を持っている。性差を考慮するという時、厳密にいうならば、生物学的な性差と社会的文化的なジェンダーに基づく差異とが含まれることを見逃してはならないわけである。

ジェンダー視点からの研究が進められて、さまざまな学術分野において、従来見落とされていた課題や概念、方法などが取り入れられるようになり、より豊かな、バランスのとれた研究が行われるようになるにつれて、生物をはじめ人間にかかわる多くの学問分野をこえて、物理・化学的な領域においても、女性研究者による研究に含まれる新たな観点の意義が評価されるようになってきている。

このように、ジェンダー視点からの学術の再構築は、その出発点をなしたものは女性研究者による従来の研究の歪みや偏りについての告発の意味を含んだ研究であっただけに、女性研究者が増加し、活発に研究が行われるようになることが重要なことと考えられた。わが国における女性研究者の状況を見るならば、このことを強調することの意味は未だ失われてはいない。しかしながら、たとえ女性研究者が多数を占めるようになったとしても、女性研究者のみによってジェンダー視点に立つ研究が行われることが目指されるべき方向ではない。より重要なことは、男女を含めて、多様な個性をもつ研究者によるジェンダー視点に立つ研究が多くの成果をあげ、それによって従来の学術の不備を補正し、新たな学術の再構築が行われることである。

すでにいくつかの点では、このような意味で従来の学術研究から新たな内容・方法をもった研究への転換がなされているが、なお多くの分野においては、ジェンダー視点からの提起は、フェミニズム的な立場からの研究という位置づけにとどまっており、研究の動向すべてを動かすに至っていない。今後さらにさまざまな分野における新たな視点に基づく研究が進められ、その成果をふまえて新たな研究の視点が広く共有されるようになることが求められるところである。